



おもてなしイベントでおみやげ・軽食を提供（JR鯖江駅前）

若者部会SAN(サン)

—若者が変われば大人が変わる。
大人が変われば地域が変わる—

JK課で一躍有名になった鯖江市ですが、その後、2015年4月に男子高校生やJK課卒業生が中心となって「若者部会SAN(サン)」が結成されました。

今回は、そんな「SAN」の活動について、鯖江市市民協働課長の橋本和久さんにお話を伺いました。

JK課事業のその後

2014年にスタートした「鯖江市役所JK課」プロジェクトは、今年第4期目の活動を迎えました。当初13名のメンバーでスタートしましたが、年々メンバー数を増やし、第4期は41名の参加を得ることができました。

当初こそ、大都市圏の方を中心として懸念心配の声もいただきましたが、平成27年度末には総務省主催の「ふるさとづくり大賞」で総務大臣賞を受賞したほか、高校現代社会の副読本の表紙にも選出されました。もはや話題性を狙った単なる打ち上げ花火という評価を超え、鯖江市の若者施策の中心的な事業に育つてきており、全国からの視察依頼も数多い状況です。

新たな若者グループの誕生

一方、市内に目を向けると、40代50代の女性を中心となって集まった「鯖江市OC(おばちゃん)課」が発足し、ユニークなまちづくり活動を進めています。さらに、JK課の活動がきっかけとなり、2015年4月に

男子高校生やJK課卒業生が中心となった「若者部会SAN」が結成されました。

SANの中心メンバーは、第1期JKメンバーの卒業生たちです。彼女たちは、知り合いの男子学生も誘って新たな若者グループを結成しました。平成27年度は、ホテルを見る会や、「サマータイム」「芋フェス」、「お菓子なまちづくり」と題した若者向けのイベントを自ら企画、実施してきました。

チャンス到来！

そんな中、平成28年に向けて活動計画を立てている折に、ビッグニュースが舞い込みます。「今春、サンドーム福井で、アイドルグループAがコンサートを行う！」

これまでもサンドームでは、県外から1、2万人を動員する大規模なコンサートが年に数回行われてきました。しかし、JR鯖江駅周辺にはこれら大勢の観客を受け入れるような施設等はなく、コンサート当日の駅周辺には、手持ちぶさた状態の来場者がありとあらゆるスペースに腰を下ろして待機している状態が見

受けられるようになっていました。

無論、その光景を見た市民からは、「臨時待合所や案内所等を設置してはどうか」、「おみやげを買ったり、食事ができるお店を出したらどうか」という声がよく上がっていました。しかし、様々なリスクを案じる大人たちは、言い出しづらくなることを避けて結局手をこまねいているだけでした。

「わたしたちの手で おもてなし」

そうした状況を尻目に、コンサートの情報を聞いたSANメンバーは、「わたしたちの手でおもてなしプロジェクトをしたい」と即決しました。資金調達のために市の「まちづくり基金事業」という公募型の補助金も獲得し、大人たちに協力と理解を求めて回りました。スペース確保、安全管理、売れ残り商品の扱い、食品衛生上の問題など様々なリスクはありましたが、粘り強く関係者との打ち合わせを重ねる姿に、大人側が感心するほどでした。そして、2016年4月、コンサート当日がやってきました。

町の大人を動かす

駅前の駐車場も無事に借りることができ、そのスペースに地元商店街の皆さんと共同出店したテントが並びました。天候にも恵まれた結果、多くの来場者が訪れ、おみやげ品や軽食を購入してくれました。メンバーが発案したオリジナルのめがね型のお菓子は、2日間で千個以上を売上げ、追加発注までかけることになりました。実は、まわりの大人たちは、口を揃えて「そんなに売れる

わけないよ」と言っていました。当日は地元町内会の壮年グループもボランティア参加し、区長（自治会長）とともに終日、応援してくれました。

トイレの提供、案内誘導等、JRも全面的にプロジェクトに協力してくれました。日曜日は休みにも関わらず、特別に営業してくださった店舗もありました。若者たちのがんばりが、町の大人をも動かした結果です。

若者自身が

若者の活動をサポート

今年度、鯖江市では彼らの活動実績を参考に、「サバエ×ワカモノ夢創造大学事業」という新たな若者支援事業を立ち上げました。これは市内の中高生を対象に、ワークショップを行うなどしてアイデアを募集し、若者自身が提案者である中高生と一緒にこれを具現化するという事業です。

市では提案型市民役事業化制度という提案制

度を活用し、SANから具体的な事業提案を受け、審査会の決定を経て委託契約を結ぶこととしました。これまでの経験を活かし、ぜひ若者ならではの斬新なアイデアを引き出してほしいと思います。

■他人事(ひとごと)から自分事に

若者の声を受けて、まちや大人が変わったことで、若者自身の意識に、ある変化を感じています。それは、これらの事業活動を通して、メンバーや若者たちが「他人事(ひとごと)」「だったまちづくりを」「自分事」として捉えてくれるようになってきたことです。つまり、自分たちが動けばまちや大人が変わることを実感したこと、当事者意識が生まれてきたわけで、まさにそこそが事業の最大の成果だと感じています。

今後、「若者が変われば大人が変わる。大人が変われば地域が変わる」という強い意気込みのもと、引き続き若者の居場所づくりと出番の創出に努めていきたいと思っています。